

## 活動報告

### 夏季集中講座 「海から見た世界史」

今年度も夏季休業期間中の八月二一日～二九日、県立柏陽高校、私立栄光学園、県立外語短期大学付属高校の共同夏季講習として計七日間の公開講座を実施した。前半（～二五日）は、三校を巡回し、後半（二六日～）は外短付属高にて行われた。

講義名・担当者・参加生徒は以下の通り。

- 第1日 二一日（木） 柏陽高校 生徒五五／教員一六名／他一名
- ①『アジアの海とネーデルラント』松木謙一（県柏陽高）
- 第2日 二十二日（金） 栄光学園会場 生徒四四／教員一六名
- ②『インド洋の歴史』大島弘尚（栄光学園高）
- 第3日 二五日（月） 外短付属会場 生徒四〇／教員二三名
- ③『大西洋の歴史』杉山 登（逗子開成中・高）
- ④『海の覇権とは』石橋 功（外短付属高）
- 第4日 二六日（火） 生徒六七／教員九名
- ⑤『中国各王朝の対外政策』岡田 健（県新栄高）
- 第5日 二七日（水） 生徒五五／教員六名
- ⑥『万里の長城の内と外』澤野 理（県新城高）
- 第6日 二八日（木） 生徒五〇／教員七名
- ⑦『中国と日本―近代史における関係を中心として』
- 早川英昭（県大船高）
- 第7日 二九日（金） 生徒四六／教員八名
- ⑧『中国と西アジア』小林克史（県秦野南が丘高）

3校のべ参加生徒数は三五七名。公開授業後の午後には授業担当者と参観者との懇談をおこなった。参加者は（授業担当者含）のべ八七名を数えた。

#### この講座がめざすもの

新しい歴史教育、教員の研修、学校間の連携の3点。ふだん他人の授業や他校の授業を見る機会はなかなかない。夏季休業中の集中的な研修としてはまだ2年目で、今後も定例化し多くの世界史教員の参加を増やしたいもの。最近よく聞く「学校間の連携」だが、本講座は学校主導の進学校合同補習ではなく、教科主導で「新しい歴史教育」を試みる先駆的なものであると評価したい。加えて他校教員の最新の授業が学習への新しい刺激・動機付けとなると期待している。もちろん教員にも同じように研修効果を期待している。

#### 各講座の内容について

講座は前半と後半で対象生徒が異なる。「海からの世界史」（前半）は、3校の一、二年生が対象。「通説」あるいは通常触れることのない「テーマ史」である。

①「東洋貿易」のシンボルで日本とも深い関わりを持つオランダ東インド会社（VOC）の歴史。有名な交易品「香辛料」だけでなく江戸のファッション「棧留」「世界的な銀の動向」に焦点をあてた。

②アジアにはすでに紀元頃から交易ルートが存在して東南アジア物産へのニーズが存在。アフリカ東海岸～東南アジアの交易ネットワークと航海技術の確立。この前提のうえに「大航海時代」が到

来したことを航海の映像教材でイメージ化して講義。

- ③ヨーロッパ諸国の「新世界」での活動と利益、海を制覇したイギリスの南北アメリカ進出についての講義。続いて「競争の場」「平和実現の場」「市場間のルート」「海域圏意識」「海陸両権力の関係」「軍事的視点」「海洋教育」などの着目ポイントを提示した。
- ④一六世紀の世界商品「香辛料」は防腐剤以上の「富と権力のシンボル」（「香木」は東アジア圏で同じ機能を持つ）でオランダがマラッカとマルク諸島を押さえた。一八世紀はイギリス「コーヒー」「砂糖」「キャラコ」、一九世紀が「石炭→鉄鉱石→石油」。いずれも「要衝と原産地」が覇権のキー。しかしこれからの海のあり方は一九世紀的な「国民国家」「領域国家」意識でなく共存共生、交易・交流の場に戻るはずで近代以前はこの状態が「ふつう」であつたことを歴史的に分析。

これらの講義は「国家」「民族」中心の世界史学習に方向転換を迫るもので、新指導要領の先取り実践でもある。受講した生徒が今後、世界史を単なる暗記物と捉えず多面的な学習に取り組むことを期待したい。

後半⑤⑧は外語短大付属高三年生の世界史選択者を対象とする集中講義。テーマは対外関係から見た中国史。「正史」ベースの王朝史でなく、対外関係に注目し、中国史全体の把握を主眼とした。

⑤⑥はいずれも周辺の「遊牧騎馬民」と中国の諸王朝との関係について。世界史ではモンゴル史観／ユーラシア史観は定説になりつつあるが、中国史ではモンゴル高原史、西域史「サイドストーリー」扱いであつた。むしろ周辺からのインパクトが中国の政治や社会を決めてきたとして、中国文明のありようは独立不変ではないことを

中国史の流れ全体で見ようとして試みた。

- ⑦アヘン戦争→辛亥革命にいたる時代では「日本との関係」を知ることと意外な「近代化の流れ」が浮き上がってくる。日本の開国と近代化の歩調、日清戦争での朝鮮をめぐる関係、侵略される側と侵略する側の動きをピックアップし日本史と中国史をつなぐ授業となった。とくに人物の動きと思想に焦点をあて、日中の歴史の相互関係をまとめようと試みた。

【音吉】幕末、渥美半島の漁民。漂流してカナダ→ロンドン→マカオ→浦賀へ。上陸を許されなかったが、聖書を名古屋弁に翻訳した。【高杉晋作】鎖国に戻せと攘夷を主張し「奇兵隊」創設で有名だが、思想的ルーツは太平天国時代の中国を訪ずれ、悲惨な戦闘と李鴻章らの「団練」「郷勇」を見聞したことにある。

他、【李鴻章】【大院君と閔妃】【魯迅】【孫文と宮崎滔天】など興味深い人物が登場した。

⑧イスラームの出現が中国に与えた影響を交易という視点で見ているとした。歴史や習慣などのあり方をコスチュームを交えて講義し基本的知識（生徒はイスラームを未学習）からスタート。その拡大イコール商業活動で「シルクロード」「マリノロード」のネットワークを動かすシステムを、「交通手段」船と駱駝、イスラム商業の「ルール」と商人グループ、利子禁止と「ワクフ」、【商品】貨幣・香辛料・奴隷などから説明した。そしてイスラムのネットワークの中心が八世紀のバグダードから一〇世紀後半にカイロへシフトし、一四世紀以降次第に機能が停滞、一七世紀にはヨーロッパ諸国の参入でインド洋・東アジアに重心が移っていったこと、大西洋貿易と太平洋貿易がリンクして一八世紀以後の植

民地化へむかう流れを指摘した。

中国に隣接する周辺諸国の外側に位置し、商業面で大きな影響を持つ「イスラーム商業圏」を知り、交易と世界経済という視点で中国史をとらえることをねらっている。唐代の「シルクロード」に加え「マリンロード」の視点を持つこと、モンゴル支配がイスラームネットワークの上に成り立っていたこと、唯一国策としておこなわれた鄭和南海遠征の意義と規模（以後中国は内向きでネットワークに対して受身になる。もちろん中国商人の活動は東南アジア交易の主力）など注目すべき点が多数あった。

#### 午後の懇談の内容について

授業と同じくらい有意義であったのは午後の参観教員と授業者の懇談である。授業者の反省と参加者感想、各校の実情、教授方法に、新指導要領と大学入試の見通し、新学説と学会動向にも及んだ。

以下、話題となった項目を挙げてみる。

- \*「興味関心」と「受験知識」との折り合い
- \*「レギュラー授業」と「特別講義」の内容とスタイルの違い
- \*小中学校の地理教育の欠陥（GNP主義？で未学習地域が多い）と歴史的地理把握のための「地図ワーク」の必要性
- \*「通常授業」と板書、プリント学習の功罪。
- \*「テクニカルチーム」をどの程度詳しく説明するか。
- \*効果的なテクニク（暗記のこつ、映像や音、コスプレ、板書「教室は劇場だ」）。
- \*ドイツの「ギムナジウム」学習形態と日本との違い。
- \*高校現場での教えかたと大学の歴史教育のギャップ。

\*「世界史A」と数年後に予想される「入試傾向」。

\*大阪大学研究プロジェクトの報告（新しい歴史研究を授業にどう取り込んでゆくか）。

\*銀の世界的な流れと明代での「消失」。（世界中の銀が中国に集まるが、北辺での馬の交易代金として支払われ、以後消えてしまう。還流し中国国内に流れたと推測されるが証拠無し）

\*中国史の「専制政治」（皇帝と臣下の対面姿勢と身分保障。唐代には皇帝も臣も「座」、宋代は臣は「立」、明代は「平伏叩頭」になる。臣下の発言に対する罰は唐代には「追放」止まり。明代は身体刑「族誅」）。

\*中国の軍制（徴兵と傭兵、強兵か弱兵か、「兵募」依存体質）。

\*「日本史」と「世界史」の補完関係（近現代史理解には不可欠）

#### 世界史授業で用いる「視覚教材」

②では映像教材を用いてインド洋交易のイメージ化をはかった。AV教材は効果的に使えば非常に効率的である。今回もう一つ「教材」を用意した。2時間連続授業の途中休憩の再開時、生徒が資料集で目にするような「モノ教材」を提示し手に触れさせた（レプリカあり実物あり、世界史教員が必ず一つや二つは持っている。世界史研究推進委員会では「レアなモノ教材」を情報提供しあっている）。反応は上々で質問票に入手方法や細かな疑問を記入していた。

以下一覽。

○東インド会社紋章（VOC）「伊万里」皿およびワイン瓶（栗田美術館レプリカ、コバルトが薄い。資料集に掲載されているものは高額骨董品だがコピー商品もある）

○ティークリッパ―模型「帆船カティサーク号」(プラモデルにもなっている有名な快速帆船。ダウ船やジャンクも欲しいが見つからない。「遣唐使船」を入手し構造の違いを示す手もある)

○スパイス各種(クローヴ・ナツメグとメース・カルダモン・シナモン・白黒胡椒等。教材用に配布されているが、何度も使うので市販の小瓶入りを揃えておく。生徒に味見させ「なぜこんなモノのために金を出して争ったのか?」と思わせればしめたもの!)

○「汗血馬／飛燕を踏む馬」(青銅製 高さ二〇cm上海博物館製実物大のものから一〇cmまであるうちの「ミドルサイズ」)

○「三彩馬」(唐三彩製 高さ五〇cm洛陽博物館レプリカ、というか土産の置物。本物なら数千万円。「駱駝と胡人」も有名)

○中国銅銭 秦半両銭・漢五銖銭・唐開元通宝(時計回りに「かいつうげんぼう」と読むのが最近の学説)・出土宋銭(洛陽博物館)・明崇禎、清順治、康熙、雍正、乾隆、嘉慶、同治、道光通宝(博物館や友誼商店で入手可能。清朝銅銭は東南アジアでも入手できるほど大量に流通し、裏にウイグル文字が刻まれて王朝としての超「中国」的性格が示されている)

○張挾端「清明上河図」(開封市 全長5m。本物と色調がやや異なるが巻物を広げると教室の横一杯になり生徒には大うけする)

○「大秦景教流行中国碑」(西安碑林拓本 高さ2mほぼ畳2畳分裏にアラム文字が確かに記されている。墨の匂いがぶんぶんし、その大きさに驚く)

○玄奘三蔵「大唐西域記」(慈恩寺 全四巻綴本。全文中国語だが雰囲気わかる。「東洋文庫」を見せるより効果的)

○磚茶と包装紙(「茶馬貿易」で遊牧民用に板状に固めた「黒茶」半発酵茶でプーアル茶に近い。陸羽『茶経』冒頭の「茶也南方嘉木」の文が印刷された京都のお茶屋さんデザイン包装紙)

司会・記録 佐藤雅信(寒川高等学校)